

日本動物福祉協会一等賞

ちっぼけなぼくと、小さな命
仙台市立南吉成小学校 四年
堀内 夕太朗 ほりうち ゆうたろう

ぼくは、む力だ。こんな小さな命すらすくうことが出来ない。ぼくはさげびながら家に帰った。そしてすぐに自分の部屋のベッドに横になった。少しなみだがおさまってから母のいる一階に下りて行った。

ばれないと思っていたけれど、母は、ぼくの顔を見てすぐに

「何かあったの？ 聞こうか？」

と心配にそうに聞いてきた。

ぼくはすこしまよったけれど、頭の中を整理しながら話し始めた。

友だちといつものように下校していた時だった。いつもの帰り道に何か落ちていたのを見つけた。落ち葉のような何か。気になってぼくたちは近づいた。するとそれは、まだ小さなかわいいスズメのヒナの死がいた。思わず目を閉じた。

「うそだ。見間ちがいだ、目のさっかくだ。」と、もう一度おそるおそる目を開けてみた。やっぱりヒナだった。車にひかれて、からからにかわいて落ち葉のようになったヒナだった。ボクの頭の中は真っ白になって、顔が熱くなった。鼻がツーンと痛くなって目から涙が出そうになった。友達に泣いているのを見られたくなくて、さげびながらぼくは、家に帰ったのだ。話を聞いた母は

「本当にあなたはやさしい子ね。」

とってしょんぼりしているぼくの頭をやさしくなでてくれた。そして

「明日くようしに行こうか？」

と言ってくれた。その時すうっと心の中のモヤモヤが晴れてきた気がした。なんでぼくはさげびながら走ってしまったのだろう。ヒナが死んでいることが悲しいから？ ちがう。このもやもやした気持ちは、何をしたいのかわからなくて、その場を走って逃げてしまったからなんだとわかった。

次の日の朝、母と一緒にヒナのところに行くと、そのとなりに小さな白い花が置いてあった。小さな女の子がよってきて

「その花ね、お姉ちゃんが置いていったんだよ。」

と教えてくれた。その子のお姉ちゃんというのはぼくと同じクラスの女の子のことだった。同じ気持ちの人が、同じクラスにいたことがわかってうれしくなった。母がふくろでヒナをそっとつつんでくれた。家の庭にうめようと思っていたけれど、ぼくらのほかにも同じ気持ちの人が、学校にいるかもしれないと思い、学校に持っていくことにした。学校につくとすぐに、先生にその話をした。返事は、

「鳥インフルエンザが流行っているからおはかはやれません。」

とことわられてしまった。ぼくはなっとくができなかった。ようち園の先生は

「やさしい気持ちありがとう。」

と言って直ぐにおはかを作ってくれていたのを思い出したからだ。それでもあきらめきれずに4月からぼくらの学校に来たばかりの教頭先生に相談してみた。教頭先生はうなずきながらぼくの話聞いて、そのふくろをあずかってくれた。あきらめないで相談してよかった。

今日あった話しを家ですると、父がおじいちゃんが住む栗原市で、今年3月に鳥インフルエンザが原いで、二十一万羽のニワトリが処分されたという話を教えてくれた。つい二か月前のことだ。自えいたいまで

手伝った大変な作業だったそうだ。母の実家の近くだったので二人とも新聞を真げんな顔で読んでいたっけ。先生をうらんでしまったこと、新聞をちゃんと読んでいなかった事を反せいした。

今週末の運動会で、ぼくら4年生は「すずめのおどり」をおどる。これは何かの縁かな。む力のちっぼけなぼくは、とび立つことのできなかつたあのヒナの分も、一生けん命おどることにした。きっと空の上であのヒナもいっしょにおどってくれるだろう。